



とこしへに

民やすかれと

祈るなる

わがよを守れ

伊勢の大神

明治天皇御製

『浜っ子』

江戸っ子は江戸に住んで三代経たないと本当の江戸っ子の仲間に入れてもらえない。横浜に三日住めば浜っ子として仲間に入れてもらえる。浜っ子三日は横浜人の自由で開放的な気風を表す言葉として今も人々の口の端に上る。

明治四年旧暦四月十五日、伊勢山皇大神宮はほぼ現在の結構と同じに新社殿が完成した。横浜の総鎮守として町を挙げての盛大な奉祝の祭りが行われた。祭りの期間については資料によつては三、四、五日間と差があるが現在の御例祭から推測して本祭りを挟んで前日に宵宮祭、後日に後宮祭の三日間が神社の公式の祭日としては推測される。棧敷が本町、弁天通り、馬車道に生まれ山車十五台に踊り屋台二十五、六台が加わ

『境内の紫陽花』



り大勢の新橋の芸者衆と共に手古舞、囃子、木遣りと奉祝の列が練り歩いた。精魂を傾けた盛大な祭りをやり終えると人々は放心状態の体となったが「横浜のみんなが初めて力を合わせて行ったお祭りでの人の心は一つになった」また「祭礼費用は五万両を超えた。横浜が日本第一の町になったことを内外に示すことができた」と資料は伝えている。この日本中を驚かした盛大なお祭りは人々の心をついにし、横浜の住人としての誇りが芽生えた。それまでは、いわゆる横浜市民という共通の意識はなかった。横浜村、吉田村、戸部村在住の人達、また山梨、静岡、群馬、東京から来た人々が共に横浜に住んでいるというだけで共通の横浜人としての意識はなかった。旧村毎の鎮守はそれとして、明治三年に横浜総鎮守として伊勢山皇大神宮を創建し

『大祓式』

- ・執行日 6月30日
- ・時間 13時・16時
- ・内容 大祓とは、半年ごとに罪穢を人形ひとがたに移し大祓詞を奏上し祓清め、厄災疫病を防ぐ、我が国で古来より続けられてきた神事です。

大祓詞を奏上しお祓い



翌明治四年に盛大な奉祝祭を新時代の横浜を挙げてやり遂げた。この三日間が新しい横浜人、いわゆる浜っ子という意識を誕生させた。

草創期の江戸と比較すると基本的に江戸は三河・遠江・駿河国からの徳川家の引越である。住人の心を一つにまとめる新しい神社を作る必要はなく、その地の鎮守である赤坂の日枝神社と神田神社を篤く崇敬した。江戸の旧市街は今に至るまで、広くほとんどがこの両神社の氏子区域である。

明治三年という年は未だ新通貨も発行されておらず廃藩置県も行われていない。維新の混乱期である。その様な中で国費三千両を以って横浜総鎮守の建立を建白し実行した当時の県令と五万両を献じて奉祝祭を斎行した町の人達に驚きを禁じ得ない。御創建時を思う

茅の輪をくぐりお祓い



大麻にてお祓い



と明治初頭の横浜の活気と横浜人の熱気を感じ取ることがができる。

明治期には伊勢山皇大神宮と同じく伊勢の神宮の天照大神を御祭神とする神社が何々大神宮として全国に祀られている。これらは明治十年以降の建立で元は神道の布教所あるいは伊勢の神宮の遥拝所であった例が多い。伊勢山皇大神宮のように当初から神社として創建されたものは他に例を見ない。また我が国の歴史の中でも社寺の門前に町ができた例は多いが町が出来た後に住民の心の拠り所の中心として神社を創建した例は稀有である。

あらためて日本の歴史の中での維新期における横浜が果たした重要性和特異性を伊勢山皇大神宮の成立の中で深く考えてみよう。

『常太刀会 奉納演武』 執行日：5月15日 13時頃

各流派（8団体）による奉納演武が執り行われます。





『例祭』

5月15日 10時

齋行





神楽殿・参集殿

平成 27 年 6 月 28 日 神楽殿並びに参集殿の地鎮祭が執り行われた後、工事は順調に進んでおります。

この神楽殿・参集殿は本殿の遷座祭の際に御神体を御遷しする仮殿となります。

竣工は平成 29 年 6 月の予定となっております。

伊勢山皇大神宮 年間恒例祭典

十一月二十三日	十一月十五日	十一月三日	十月十七日	九月十五日	八月二十日	六月三十日	五月十六日	五月十五日	五月十四日	毎月一日・十五日
新嘗祭	七五三祭	明治祭	神嘗奉祝祭	敬老祭	杵築宮並 子之大神例祭	大祓式	後宮祭	例祭	宵宮祭	月次祭
			秋季皇霊祭 遥拝式							